

イントロダクション

一九七〇年二月十一日のセミナーで、ラカンは精神分析の臨床が設立する「享楽の場」について語っています⁽¹⁾。それはエコノミストが語る「市場」のようなもので、何かのエネルギーが働いている場所として想定されますが、より厳密にいえば電磁場とのアナロジーで考えられるものです。たとえば光が水面を透過して屈折する時、その屈折させる観測可能な「力」によって電磁気学における「場」の概念が定義されます。ちょうどそれと同じように、情動に一定の変化をもたらすがそれ 자체直接には観測されない抽象的な場として「享楽の場」が構想されます。

精神分析をもちろん含めた「こころの臨床」において、わたしたちの意識を通じてまず第一に観測されるのは、情動の変化であるといえるでしょう。そこには何か変化を起こす力が作用しているはずです。例えば不安を感じながら分析家の部屋のドアを叩いた人が、語り終えたあと片時、ほっと安堵の息をつくように、それは臨床の経験を通じて誰にも気づかれることです。お望みなら精神医学で用いられる不

安症状評価尺度で、その力がもたらす変化を数値化することもできます。

語りによる情動の変化はどのようにして起こるのでしょうか？ 神経認知科学的な思考のスタイルに馴染んだ方なら、情動処理に関わる神経ネットワーク、辺縁系と大脳皮質をつなぐループのコネクションの変化によって、と答えるかもしれません。言葉は、しかしひューロンに直接影響を及ぼすわけではありません。

言葉が影響すること、それはヒューロンによって計算される事柄の全てに對してであり、情動に関する情報の総体というべきかもしません。おそらく一定のコードに沿って、身体生理学的な感覚を伴つて、それは意識に出力されます。常に移ろいやく、つかの間の事柄であり、絶えざる予測とその誤差のズレによってわたしたちの情動は形成されているのでしょう。冷たい雨に降られてカフェに駆け込んで、するカフェ・オ・レの熱さにアチチと叫び、思わず笑い出したくなるように。その一連の情動の変化プロセスは片時も完成したものとしては表象されず、常に移ろいやきます。つまりそれは確率論的な変化するものとしてしか、書くことはできません。あるいは、書き終えないことを止めないものです。

そのような変化する力の場を、ヒトが生きることそのものの悦び——享樂 *jouissance*——の場と呼ぶことで、わたしたちの思索をつづけることになります。享樂は言葉が影響を与える、ある実体であり、もちろん享樂する身体なしにはありえないのですが、生理学的な過程そのものには還元されないものです。しかし言葉の力がさやかでも治療の力を發揮するのは、言葉がそんな実体に対して効果 *effect* をおよぼし、意識される情動を動かす *affect* からです。ラカンはそのように、精神分析が関わる唯一の実体として享樂を考えました。それは目に見える情動＝変化を起こす力から想定される、ある抽象的な場

という概念に基づいてしか考えられないものなのです。シニフィアンを通じて解説され、到達される無意識の知が、言葉の厳密な意味での「フロイト的無意識」だったのですが、今やそれは、シニフィアンにおいて享樂する無意識として捉えなおされるでしょう。それは無意識の認識論的な地位について、実質的な革命をもたらすはずです……。

残念ながらラカンは、この享樂の場について生前それ以上はつきりした考え方を展開することはありませんでした。しかし彼のアイデアは、その死後四十数年を経て、今日驚くべき先見性を示しているように思われます。享樂の場に基づいてわたしたちの臨床を再起動させることは、現代のこころの臨床が科学実証主義的であろうとして図らずも至りついてしまった荒涼とした原野で、確かな方向性となるのではないでしょうか？

例えばこの三十年間の精神医学が、脳神経科学と遺伝学の進歩にほとんど最後の期待をかけながら、こころの病気——たとえば「統合失調症」について、結局はひとつの疾患として見做しうるほどのまとまつた知見を見出すにいたらず、治療に関しても、六十年前から本質的に変化の無い薬物療法をはじめ、さしたる進歩をもたらさなかつたことをどう考えれば良いのでしょうか？

「精神疾患は、精神機能の基盤となる心理的、生物的、または社会的な機能の障害などが原因」となり生じる、などと我が国の高等学校でも教えられるようになりました。つまるところ、精神病について真正な意味で治療的に可能なことは、「こころ」と「身体」が言葉を通じて結びつくような場における「社会」的なケアでしかないのかもしれません。無論こころや言葉だけでは全くされない、しかし神経学的なプロセスにも還元されない生の享樂は、こうした治療の場で語られるのであり、そこでこそ変容

しうるのです。

先に述べたように、享楽は確かに身体にかかるものです。身体とは、もちろん肉と骨という基盤を持ちますが、なによりまず「私の身体」というひとつのもとまったくいたイメージネール＝想像的なものであり、それは象徴的なプロセスを介して、この「私」に折り重なります。「あなた」と同じような「わたし」の身体、「わたし」は「あなた」のようになりたい……そのような言説の幻想的な効果において、自我イメージは身体の周延へと延長され、享楽はそれらを満たします。お気に入りの「わたしの車」を驅る悦び。ドレスに身を包む「素敵なわたし」の満足。あるいはまた、「わたし」のイメージ固有の苦しみ、摂食障害や醜形恐怖における身体イメージの享楽……さらにヴァーチャルな身体イメージによってそれは補完され、その完璧なイメージがもたらす悦びと苦痛へと享楽は拡張されます。コスプレによつて、着ぐるみをまとい、あるいはVRでアバターとなることで、ボヴァリーフ夫人をモデルにするのではなく、銀幕のモンローのメークアップを真似るのでもなく、セーラームーンというキャラそのものに「なる」ことによつて、今日の女たちは傷つき、病み、あるいは闘うのではないでしょうか？ アニメは単なる絵空事／イマジネールではなく、すでに、わたしたちの時代に固有の、無意識を考えるうえで欠かせない言説において、享楽の短絡路を開いているのではないでしょうか。精神病者にも当然あるはずの生の享樂は、例えは私の「作品」のアイデアが剽窃されるという被害妄想のかたちで、すでにそのような媒体を介して燃え広がつていたのではないでしょうか。

フロイトが、イエンゼンを、ゲーテを、ドストエフスキイを読むべしと主張したように、偉大な作家は無意識の探求の先達なのでした。しかしそこで問題となるのは、もつぱら「ひとつの言語として」

comme un langage 構造化され、ゆえに解読される無意識です。言語を経て無意識へ至るあらゆる試みが尽きることはないのですが、その先で探求されるような——もはや私でない何かが享樂し、意味のない、いまだ言葉ならざるコトバ／ララング *lalangue*として漏れ伝わるような——新しい無意識は、イメージそれ 자체が常に動くものとして描かれ、情動を動かす場において、つまり「アニメ」において、その入り口を示すはずです。

ですから本書が目指すのは、作品についての精神分析的な「解説」を行うということではありえません。むしろアニメ作品の方が無意識において作動するララングを捉える点で常に先行し、わたしたちはそれに追いつかなければならぬのです。ラカンが精神分析の臨床を捉えるために構築した諸概念は、アニメにおいて、あたかも凡庸な解釈の御株を奪うように、すでに形を与えられ作動しています。

さてこの先アニメは、どこへ向かうのでしょうか。それはいずれ、A.I.によつて再生産され続けるデジタルイメージの「自然」として、たぶん人類が死滅したあとも描かれ続け、享楽の場として、誰も見る者がいないうままで動き続けるでしょうか。もしかするとそれは描かれることをやめない、現実界の完全な現出となるかもしれません。ラカンはかつて、そのように語りました——「症状は、現実界について書かれる事を止めぬ」⁽²⁾。

果たしてそこからの出口はあるのでしょうか？ そのような、未来について語ること自体が否定されるような予測が実現されるまでの束の間、つまり、いざれはおよそ描かれるることはヒトでないものが描くこととなり、その限りで何も新しいものは描かれないだろうという諦念のもとで、しかし描き終えないことをやめない、そのような反復される無意識の運動に寄り添つて、わたしたちの思索の企みを展開

したいと考えます。アニメイトされたものにおいて、享楽の場においてラカンが見出した無意識を、いつもさらにもう一度、再起動させること——そこには「希望は残されている」ように感じられるからです、もちろん「どんな時にも」。